

【視察報告】

ヨーロッパ博物館視察記 I

間 多 善 行

はじめに

私は数年前、ヨーロッパ各国をさる新聞社に勤める友人とともに一ヶ月程旅をして歩いた。その時フリーの時間にはできる限り博物館を見学して廻ったので、今そのときの手控えを基に私が視て感じたとおりをヨーロッパ博物館視察記として数回に亘って連載して行こうと思う。最初にお断りして置かなければならないが、当時私は歴史・美術系のコレクションを整理する仕事をしていたので美術系の博物館が主になっていることをご諒承願いたい。

廻った国は九ヶ国、殆んど首都だけであるが例外としてドイツのフランクフルト、イタリアのフィレンツェ等もある。本誌は学術雑誌であるから、博物館に直接関係あるもの以外の記述は差控えることにするが、一面私はこの旅行に際して、「視察旅行とは博物館的認識の実践である」という命題の実験をするつもりで出かけ、十分その目的を達したとも思っているのだから、その観点から、博物館と直接関係ないものでも「博物館的認識」上面白く思うものは取り上げることにしたことをお赦し頂きたい。ところで、「博物館的認識」というのはどうしたことかということ、これは私の提唱している「博物館理論」の一環をなすもので、その概要は「博物館学雑誌」第11巻第1号の拙稿「博物館特有の機能」として発表してあるのでここでは再説しないが、要するに私は、この度のヨーロッパ旅行全体を「ヨーロッパという大きな博物館」を見に行くと解釈して、観察を実施して来たわけである。それを「博物館的認識」と名付けているのである。従って旅行費用は「博物館・ヨーロッパ」の入館料に相当し、成田空港はその博物館の第1ゲートに当たるわけである。それではいよいよ入館することにしよう。時は7月27日であった。

フランクフルト

第1ゲート4番からDC8機に搭乗した私は国内線でジャンボ機に乗りつけていたので、こんな小さな機種で9時間も大丈夫かなといささか不安になったが、後で聞いたところによるとモスクワ空港は舗装が不完全でジャンボが使えないということであった。さて、今度の旅行の楽しみの一つは、シベリア経由で、人跡未踏の広野を

空から視られるということであった。ところが思いもかけぬ障害でとうとうこの楽しみは実現せずに終わってしまった。成田を飛び立ってから1時間半ばかり経って「只今、ハバロフスクの上空を通過しております。これより針路を西にとってシベリアを横断します」というアナウンスがあった。時こそ至れど、私はあのシベリア抑留者の集合地として喧伝された街を一眼見ておこうと窓際顔に顔を寄せた。ところがあいにく夏の陽が高くなったところで上昇気流が盛んらしく、無数の綿ぎれを振り撒いたように積雲が対流圏に天井を張ったように浮かんでいる。雲の間から地上はちらちら見えるのであるが、とても一つの景観にまとまることはない。ハバロフスクの街を見ることはあきらめて、腰を落付けて本を読むことにした。30分程経って窓外を見たらまだ先刻と同じ状態である。なあーにまだあと、7時間もあるんだからそのうち晴れるだろうと強いて気を落付けたが、無知というのは恐ろしいもので、とうとうこの状態を繰り返しながら9時間を過ぎてしまった。後になって考えなおしてから私は大陸気象上の一つの特徴に思い至った。すなわち、極寒地の大陸は冬は水雪で覆われるから大気は極度に乾燥しているが、春が過ぎ、夏ともなると大地も漸やく暖まって、水雪が融け初め、盛夏に至って日本のいわゆる「水ぬるむ」といわれる早春の季節が到来するのであった。さてこそ大気も湿気をたっぷり含んで暖った気団がかけろろろとなって盛んに立ち昇り、上昇とともに断熱膨脹を起して無数の積雲をばらまくことになるわけで、こんなことも理屈では解っているが、実物に遭遇して見ないと本当に自分の知識として頭に融け込まないんだなと、とんだところで「博物館的認識」の重要さを再認識させられる羽目になったわけである。余談はさておき、わが乗機は9時間という馬鹿長い時間をかけて、積雲のとび石の散乱する広野原のようなシベリア上空を飛び越え、やっと「あと30分でモスクワ空港に着陸します」とアナウンスがあったときは正直行ってほっとした。

モスクワ空港は給油と乗員交代のために着陸するだけで、乗客の乗降はない。ここでの「博物館的観察」も面白いのが相当あるが、長くなるので割愛して、フランクフルトまで再び機中の人となる。モスクワ空港は中心街からどのくらい距離があるのかしらないが、夕闇迫る

薄霧の中にクレムリン宮のであろう葱坊主のような尖塔がシルエットになって見えたのと、成田空港周辺によく似た地形らしく、畑の中に小さな丘や森が点々と散在していたのが印象に残っている。あとは暮れなずむ高緯度地帯の夏の空を飛ぶこと3時間にして漸やく第1日の行程を終ってフランクフルト空港に降り立った。

フランクフルト空港は、モスクワ空港が閑散としていたのに比べて人車の往来頻繁な上に、これはドイツのお国柄かあるいは何か祭りでもあったのか分からないが、ゲートの周辺のフェンスに何百本という旗が林立していたのには驚かされた。これは、その後どの空港でも余り見かけなかった光景のように思う。さて、ヨーロッパ到着第一夜はかくして、フランクフルトの余り上等でない、小さいホテルで就寝した。このホテルで四泊したのであるが、大体ヨーロッパのホテルは何処でも日本のホテルのようにサービスの行き届いたところは一つもなく、不愛想なのが普通であるが、ここのホテルはその中でも特別に悪く、フロントには仏頂面のクラークが一人いるだけで、ボーイは一人もいないし、あとメイドが二、三人溜り場において、ベルを押したらやって来るだけであった。

翌日は市内見物である。フランクフルトは首都ではないが、ちょうど西ドイツの中央に位置していて、人口70万位の中都市で、経済活動が盛んなところから航空交通の要点になっているようである。中世から商業都市として栄えていたらしく、街は第二次大戦で大破したが、現在は戦火の跡を止めないほど復旧している。中世以来のいわゆる旧跡に属する城門とか、教会、市庁舎などは当時の面影を伝えるように復原保存されている。その街並の真っただ中にゲーテハウスがあった。

1. ゲーテハウス・ゲーテ博物館

1749年、ゲーテがここで生れて青年期まで過したという家を、資料に基づいて忠実に復元したゲーテハウスと、ゲーテの原稿その他の資料を収集した博物館とが隣合せに並んでいる。パンフレットには Goethe Haus und Goethe Museum とあるがハウスの方はともかく Museumの方は博物館といわれるような大袈裟なものではない。まあ資料館とでもいうべきであるが、ドイツには日本の資料館に相等する呼称がないのかもしれない。

ハウスは中世風の街並にふさわしい石造の四階建てで、ゲーテの家庭が裕福な商家だったことを示している。一階が事務所と食堂・台所で、二階は応接室と音楽室、三階は両親の居間・寝室・書斎、四階がゲーテの書斎・寝室になっている。各室に据付用の大きな暖

炉を置いてあり、デザインが一つ一つ異なるところを見ると、アンティークで当時のものを集めたのかと思うが、中に磁器で出来た宮殿用と思われる贅沢なものもあった。

市内観光は午前中で終って、午後は日航の支店へ行って旅程のアレンジをしているうちに時間が経って4時近くになった。案内書を見るとメイン川の畔りに美術館がある。あまり時間はないが、とにかく見て置こうとタクシーに乗って「ムーゼウム」と言ったのが間違いのもので、こちらが考えている方向と逆の方へどんどん走って行くので、あわてて「ナイン、ナイン、ブリュッケ、ブリュッケ」と、とにかく橋のある方へ行けと指で指し示して川端へ出させ、川沿いの道を建物を見ながら流させて漸やくそれらしいのを見付けてタクシーを降りた。入口へ近付いて看板を見ると、何んとそれは美術館ではなくて民族博物館であった。勿論それも見たいが、時間がないのでどうしても美術館を見て置きたいと歩いて先へ行くこと15分、漸やく見付け出して入口へ行ったときは既に4時半になっていた。

2. フランクフルト市立美術館

さすがに公立美術館だけあってルネサンス式のちょっと見たところ上野の国立博物館と同じ位の間口がある。急ぎ足で飛び込んだところ、切符売場が見当らない。仕方がないので玄関に近いところへ机を置いた受けつけのようなところへ行って事務職員らしい人に、チケットは何処で買えばいいのかと、身振り手振りを交えて片言のドイツ語で聞いたところ、いきなり流暢な日本語で「あなたがたは絵画館と彫刻館とどちらをご覧になりますか、彫刻館をご覧になるならば入場料は3マルクですが、絵画館だけならば入場無料です」とやられたのにはびっくり仰天、開いた口がふさがらないとはこういうことをいうのだと思った。勿論両方見る余裕などはなく、無料の絵画館だけを見せて頂くことにして、その人がどうしてそんなに日本語が旨いのか聞く時間もなく、中へ進んだ。

一応、中世以来の有名作家の作品を一通り揃えてあるが大作は一点もなく、中作が二、三点、あとは小品ばかりである。中にクールベの海の波だけを描いた50号位の作品が妙に頭の中に残っている。

右のような次第で「ヨーロッパ博物館」入館第2日はとんだ膝栗毛で終った。

3日目はハイデルベルクの街及び古城を見学する。「アルト・ハイデルベルク」で有名なハイデルベルク大学も今は新館が続々と建てられて、昔の面影はない。それよ

りもネツカー川の対岸にある古城が素晴らしい。古城は小高い山の中腹にあって、城門の下のところ迄バスが行って、バスを降りてから10分位歩いて城門に入る。城門の右に中世武器の博物館があったが、小規模で日本の何々神社の宝物館といった体裁なので帰りに時間があたら入ることにして城の方へ先に入った。城門は山の道との間に深い溝を掘って、門の入口まで十メートルばかりが通り道になっている。従って城へ入るには崖の上の馬の背のようになった一本道を通る以外にないことになる。これはヨーロッパの城郭はみな似たような構造になっていたらしく、後に見たロンドン塔が平城にもかかわらず入口が酷似した構造になっていた。日本の城の辨形がこれに相当するようになるが、城郭研究家のご教示を得たい。

さて、城門を入ると相当な平地があって、平地を囲むように種々の城館が建っている。日本のように天守閣はなく、物見のためには城館の屋根がバルコニーになっていて、その用を果している。今、そのバルコニーに立つと素晴らしい景観をほしいままにすることができる。このハイデルベルク城はライン河の支流ネツカー川が山脈に切り込んだV字状狭谷の中腹に位置している要害である。その対岸は高級住宅地にでもなっているらしく、繁みの中に点々とバンガロー風の家が数百戸建っていて、その配置の妙、配色の変化が実に芸術的にできていて、眼も醒めるばかりの感動を覚えた。大体、人間というものは高いところから見る眺望には感動を覚えるものであるが、それにも高さや距離によって色々差があるらしく、飛行機のように余り高いところから人工物を見るときは、好奇心は満たさせられるが美的感動は受けないように思う。池袋のサンシャインビルの屋上から見ても私は飛行機から街を見下しているのと同じ印象を受けた。ところが飛行機からアルプス山脈を見たときと、アラスカのアンカレッジを飛び立って右前方にマッキンレーと大氷河を見たときは腹の底から沸き上って来るような感動を覚えた。これは美学でいう「崇高美」であろう。ところがハイデルベルク城のバルコニーから眺めた景観はそれとも違う、うっとりさせるような魅惑的な感動であった。「優美」とでも名付けて置こうか。

さて、道草を食っているうちに予定の紙数を突破してしまった。この視察記も次の日程を急がなければならない。次回はウィーンを視察してできればローマまで足を伸ばしたい。